金子みすゞ論

寺本　弓江

一、序論

金子みすゞは大正から昭和初期にかけて活躍した童謡詩人で、当時の一流詩人たちに認められ、西條八十に「若き童謡詩人の巨星」と称賛されたほどの才能を持つ詩人であった。しかし、若くして自ら命を絶ったため、みすゞの創作期間は短く、その作品もまとめられていなかったため、五十年以上もの間埋もれていたが、作家の矢崎節夫氏により、現代に甦った。その五百十二編にものぼる作品は、人や生きものだけではなく、地球上に存在するすべてのものに温かい眼差しを注いでいる。そして、今も新鮮に輝き続けている。

そのみすゞの作品を読んだ時に、心の安らぎや、温かさを感じるのは何故だろうか。

第一章では、みすゞの童謡が生まれた背景を探るため、生い立ちと性格について考え、第二章では、第一節「ファンタジー」、第二節「純真」、第三節「ふるさと」にわけ、この三つをキーワードに、作品の魅力を探り、第三章で、みすゞの全詩に流れる精神に迫り、童謡詩人金子みすゞを深く追求していきたい。

二、本論

第一章　金子みすゞの生い立ちと性格

まず金子みすゞの全貌を知るために、彼女の生い立ちから述べることとする。

金子みすゞは、明治三十六年四月十一日、山口県大津郡仙崎村に、父庄之助、母ミチの長女として生まれた。本名をテルといい、金子家には他に、兄堅助、祖母ウメがおり、テル誕生の二年後には弟正祐が生まれる。この弟正祐が満一歳になった時に、父庄之助が、若くしてこの世を去った。

信仰心の厚い祖母や母は、「お父さんは見えないけれど、みんなのそばにいて見守ってくださるのよ」と、みすゞを励ました。この悲しい出来事を通して「金子みすゞ」の核を成す、見えぬものを信じる心、思いやる心が形成されたと思われる。

その後、その突然の不幸に輪をかけるように、弟正祐が、母ミチの妹が嫁いだ上山家に養子にもらわれていった。

上山家（上山文英堂書店）に正祐が養子に入った頃から、金子家は上山家の後押しで、大津郡でただ一軒の本屋を始める。この金子文英堂は、ラジオのような情報媒体のない時代では、情報が一番速く入ってくるし、ウメやミチの誰にでも平等でやさしい人柄も輪をかけたのだろう、自然と町の文化の中心となっていった。その中でテルは、多くのことを学び、考える心優しい子に育っていったことだろう。

明治四十三年、瀬戸崎尋常小学校へ入学したテルは、クラスの誰からも好かれ、そのうえ先生の信頼も厚く、一年生から六年生までずっと級長を務めるほど優秀であった。

大正五年三月　小学校を卒業したテルは、大津郡立大津高等女学校（現在の県立大津高等学校）に入学した。女学校でのテルは小学校と同じように、優秀で皆に好かれる存在であった。五十年以上経った現在も多くの人が刻明に彼女のことを語っている。それはテルが魅力的で、印象深かったからだろう。中でも、同級生以外の人にも伝説的に知れ渡っているエピソードがある。それは、学芸会の時にテルが、自分で創った話をやりたいと言い出し、当日、全校生徒と先生達の前で、いま創ったばかりの話ですがといって、原稿も見ずに話をした、というものである。このエピソードのほかにも数々のエピソードがあり、そのどれもテルのことを悪く言うものはいない。それはまた、テルが思いやり深い性格であったからに違いないだろう。四年間の女学校生活は、親友（田辺豊々代）もできた充実した日々であった。その様子は、大津高女の校友誌『ミサヲ』に毎年選ばれて載せられたテルの文章にみることができ、その文章はどれも後のみすゞを思わせる美しい文章で、テルの自分以外のものに対して常に一歩下がって思い入れる姿がよく表れていて、みすゞ童謡の精神に相通じるものがある。

この平穏無事な学生生活の中、金子家には大きな変化が訪れていた。下関の上山文英堂に嫁いでいたフジが亡くなり、その十ヵ月後、夫のいない母ミチが上山松蔵（故フジの夫）と再婚し、実の息子正祐のいる上山家に実の母であることを隠して嫁ぐことになったのである。この込み入った事態は、テル満十六歳の出来事だった。この時から金子家は、祖母ウメ、兄堅助、テルの三人になり、テルは女学校卒業後、教師になる道を断り、家業に専念するようになった。この頃、三人になり淋しく思われた金子家に、実の兄姉とは知らず、教養深い従兄姉と慕って正祐が出入りするようになる。養子であることを隠すために仙崎に行くことをほとんど許されていなかった正祐であったが、継母ミチの意向で許しがでたのである。しかし仲を深めていくうちに、女っ気のない正祐にとって、年の近いテルは次第に従姉の域をはみだした存在になっていった。後にそのあわ

い想いはテルの運命を左右するようになる。
大正十二年四月、兄堅助の結婚を機にテルは、下関の上山文英堂に生活の場を移した。当時、大規模な書店であった上山文英堂の、同じ下関の小さな支店で、ただ一人の店番としてテルは働いた。この小さな店はテルにとって、全世界、全宇宙にも等しかったであろう。ここでテルは本を読み耽り、自由に空想し、自らの想いを素直に歌い始めるのである。
大正十二年、テルは「金子みすゞ」の名前で、『童謡』『婦人倶楽部』『婦人画報』『金の星』の四誌に初めて投稿する。『金の星』以外の三誌の選者は、テルが師と仰ぐ西條八十であった。投稿してから二ヵ月後、四誌の九月号に「お魚」など、みすゞの作品すべてが入選していた。この時から童謡詩人金子みすゞとしての人生が始まるのである。
童謡を書き始めてわずか一ヵ月、こんなにたくさん選ばれるとは夢にも思わなかったみすゞは、泣きたいほどの感激を受け、

閨秀の童謡詩人が皆無の今日、この調子で努力して頂きたいとおもふ。(註1)

という八十の励ましに応えるかのように次々と作品を投稿し、みすゞ独特の精神世界を開花させていった。みすゞは大正十二年以後昭和四年までに、様々な雑誌に九十編を発表する。しかし、みすゞにとってもっとも恵まれた時期は、大正十三年六月号までの十ヵ月間、いわゆる八十時代(八十が渡仏するまで)である。この間に『童謡』で選ばれた作品は二十三編にのぼる。その後は八十が帰国するまでの二十一ヵ月の間は、十三編だけである。これは童謡の師を失ったと同時に、投稿する情熱も失ったからであろう。しかし、八十のいない恵まれない時期にでさえ、みすゞは自分を高めようと、童謡誌『曼珠沙華』に参加したり、様々な雑誌から選んだ詩などを集めた詩集を作っていた。辛いことや悲しいことがあっても、常に向上心を忘れず、希望を持ち、耐え生き抜こうとする力強いけれどもそれが自然にできる広い心を持つみすゞの姿がそこにはあった。
しかし運命は童謡詩人としてのみすゞだけでなく、女としてのテルの人生にも恵まれぬ不幸の影をおとしていった。みすゞを「薄幸の童謡詩人」(註2)と呼ばしめる人生は大正十四年、次々と幕を開ける。はじめに、親友田辺豊々代の死、次に、みすゞに想いをよせる弟正祐を、みすゞから引き離すために仕組まれた結婚である。無二の親友の死は、心の拠り所を奪い、何もかも一人で背負い込むさびしい人間にしてしまい、そして意に染まぬ結婚は、正祐が養子である

ことを暴露する結果となり、また結婚生活を困難にしたのであった。しかし、この時みすゞは、

流されながらも花の目は、きっと大空をみて居ませう。(註3)

と、堪え忍び、混沌としていながらも、自筆童謡集『美しい町』『空のかあさま』を完成させている。それはみすゞにとっての救いが童謡にあり、童謡の中に自分を生かして、現実の自分を押し殺すことを決めたかのように思われる。

大正十五年、みすゞと夫宮本啓喜（上山文英堂番頭）の間に半年も経たないうちに離婚話が持ち上がるが、みすゞが妊娠したため、別れることもできなかった。実生活では思うようにいかないみすゞではあったが、童謡詩人としては着実に進歩を遂げており、八十が帰国したのを機に、『童話』にたてつづけに作品が発表され、『日本童謡集一九二六年版』に、「大漁」が載せられた。この童謡集を編集した「童謡詩人会」は、八十をはじめ、北原白秋、島崎藤村、竹久夢二など三十三名を会員としており、みすゞは推挙されて入会を認められ、女性としては与謝野晶子に次ぐ二人目の詩人となった。童謡を書き始めてわずか三年の異例の速さである。ここにきてみすゞは、童謡詩人金子みすゞとして認められ、一流詩人への大きな足がかりをつかむこととなる。

大正十五年十一月、みすゞは長女ふさえを出産する。大きな飛躍を遂げようとしていたみすゞだったが、生命の誕生を知ることで、生きる希望を見つけ、母として妻として生きることに全力を尽くすようになる。が、しかし、弟正祐の願いによりその才能を眠らせることなく、再び童謡世界で生き始めようとしていた。そんな矢先、夫との間が再び不仲になり、発病（夫の遊びが元で淋病になった）し、挙げ句の果てに、啓喜に詩作や手紙を書くことを禁じられたのだった。みすゞがこの苦しさの救いを求めたのはやはり童謡であった。自筆童謡集の三冊目『さみしい王女』をかきあげている。そして、閉じようとしていた童謡世界の扉を、ふさえのかたことの言葉の中に想像の世界を見つけることで押しあけたのだった。ふさえのかたことの言葉を、『南京玉』とタイトルをつけメモしていったみすゞにとって、次第にふさえそのものが童謡と同じく何ものにもかえがたいみすゞの世界そのものになっていった。

昭和五年二月九日、『南京玉』はみすゞの体調が悪化したのと、夫と別居したことで終わる。後に正式に離婚が決定するが、夫啓喜は、みすゞが拒むことを計算に入れた慰謝料請求のために、ふさえの引渡しを求めた。すでに生きがい以上の存在であるふさえを手放すことはみすゞにとって耐えがたいことであった。みすゞは、ふさえを連れにい

くと断言された日に、自らの命を賭した抵抗をした。もっと他に方法はあったと思うのだが、何より他人に迷惑をかけることが嫌いで、一人で背負い込むみすゞは自分が犠牲になることを選んだのだろう。

昭和五年三月十日、金子みすゞ、本名テルは、上山文英堂書店内の自室で、カルモチンを飲んで自らの命を絶った。享年満二十六歳の若さであった。みすゞの残した遺書の夫宛のものには、

> あなたがあたえられるのはお金だけで、心の糧ではありません。私はふうちゃんを心の豊かな子に育てたいのです。(註4)

とあった。そして松蔵夫婦に、くれぐれもふさえのことをよろしく頼むと・・・。

金子みすゞはよく薄幸の童謡詩人として扱われがちであるがそれは、客観的な見地からの判断であると思う。みすゞを何十年もかけて甦らせた矢崎節夫氏はこう語る。

> 私の出会ったすべての人々の心の中にいまもなおお温かい思い出とともに生きているみすゞの姿を見る時、私にはみ すゞが薄幸だったとは思えないのである。(註5)

みすゞは心静かな優しい女性であった。常に、誰に対しても、何事においても謙虚な思いやり深い女性であった。そして幾度となく襲う運命を全身全霊でうけとめる芯の強さを持っていた。そんなみすゞは自分のことを薄幸だと思うであろうか。みすゞの唯一の自己表現である童謡。その一つ一つをとってみても、嘆いたり悔やんだりしているものはなく、常に前向きであり、強い姿勢、読む人の心をやすらかにさせる深い優しさがあるだけである。みすゞの遺書にある、

> 今夜の月のように私の心も静かです。(註6)

という言葉は、波瀾万丈な人生とはうらはらな、みすゞの清らかな魂を感じさせる。

何にも汚されることのない心、それを童謡という、心と心で結びあう詩で表現した真の童謡詩人、それが金子みすゞである。

第二章　作品の魅力

第一節　「ファンタジー」

みすゞの作品の魅力の一つに、果てしない想像の世界をみせてくれるということがある。西條八十はこのみすゞのファンタスティックなイメージの展開を非常に高く評価した。ここに八十が絶賛した作品を一つ紹介する。

「砂の王國」

私はいま　砂のお國の王様です。　お山と、谷と、野原と、川を　思う通りに變へてゆきます。
お伽噺の王様だつて　自分のお山や、川を、　こんなに變へはしないでせう。　私はいま　ほんとうにえらい王様です。(註7)

この「砂の王國」は、、人間の想像力、空想力というものは、自由自在で限りがないということを教えてくれる。

「露」

誰にもいわずにおきませう。　家のお庭のすみつこで、花がほろりと泣いたこと。　もしも噂がひろがって　蜂のお耳へはいつたら　わるいことでもしたやうに、　蜜をかへしに行くでしょう。(註8)

みすゞの自在心は様々な世界を作り上げ、自然にファンタジーの世界へ導いてくれる。みすゞの手にかかれば何でもファンタジーへの扉になる。その一つが「露」である。「露」の中では、人間と花、蜂が同じ世界で言葉を交わしあっている。みすゞのすべてのものを同じ目線で見る心がファンタジー世界を創りだす要因の一つになっている。身近なものでも人間と同じだと考えてみればそこにファンタジーは広がり、いとおしく大切な存在になっていくのである。ゆえに、みすゞの作風はファンタスティックであると共に優しみにあふれており、みすゞのファンタジー世界はきらびやかな幻想をあたえるのではなく、みすゞの創りだす世界が本当に身近にあるような心持ちにさせる。それは一見平凡に思える題材を使っていながらも、みすゞの感性が豊であるため、平凡の中にでさえ美を見せてくれるからではないだろうか。

「草山」

草山の中からきいていると　いろんな楽しい声がする。
「けふで七日も雨ふらぬ　のどがかわいた　水欲しい。」
それはお山の黒い土。　「空にきれいな雲がある　お手々ひろげて摑まうか。」　それは小さな蕨の子。「お日さんが呼ぶからのぞかうか。」　「私もわたしも、ついてゆく。」　ぐみの芽、(註9)芝の芽、　茅萱の葉、いろんなはしゃいだ声がする。

みすゞの幻想は平凡の中の美であると思う。その「美」とは、土、草、花、など何もかもが、魂を持ち、役割を担

い、懸命に生き、輝いている、その輝きである。みすゞはその輝きをつかまえ、慈しみ、いとおしみ、詩に表現したのである。ゆえに、みすゞのファンタジーは、夢だけをあたえるのではなく、温かい心、思いやりの心を与え、また思い出させてくれる。それが、みすゞの詩の魅力の一つである。

第二節　「純真」

みすゞの童謡には、子供の生活を土台に、子供の心情を純粋に唄ったものがある。

「ふしぎ」

わたしはふしぎでたまらない、　黒い雲からふる雨が、銀にひかつてゐることが。　私は不思議でたまらない、青い桑の葉食べてゐる、蠶が白くなることが。　私は不思議でたまらない、　たれもいぢらぬ夕顔が、　ひとりでぱらりと開くのが。　私は不思議でたまらない、　誰にきいても笑つてて、　あたりまへだ、　といふことが。(註10)

この詩には純真さがよく表れていると思う。世の中には、心してよくみると不思議なことだらけである。しかし、大人になるにつれ、その不思議だと思っていたことが当たり前になり、不思議だと思える心さえなくなっていく。みすゞは純粋にそのことが「不思議」をみつける心を思い出してほしいと願っているのだろう。

みすゞの詩を読んで、童心を呼び起こす時に、なつかしく、寂しく思うときがある。それはまた、みすゞが子供のふとした寂寥や、罪悪感などの生活気分を巧みに描き、その中で人間の本質に迫っているからではないだろうか。ここに一つの作品を挙げる。

「犬」

うちのだりあの咲いた日に　酒屋のクロは死にました。おもてであそぶわたしらを、　いつでも、おこるをばさんが、　おろおろ泣いて居りました。　その日、學校でそのことを(註11)　おもしろさうに話してて、　ふつとさみしくなりました。

この詩の最後の部分に、人間の本質、本来の姿であってほしいやさしさと、思いやりの心があると考える。教諭である大越和孝氏が、

クロも死んだし、おばさんも悲しんでるのに、それをおもしろそうに話している自分に気が付いたんだ。そして、自分のそういう心が嫌だなあと思って、さみしくなるということもあると思います。(註12)

と生徒たちに説いているように、この心の移り変わりは、自分中心から相手中心の立場で物事をとらえる思いやりがもたらすものである。そしてこの思いやりは、純粋な気持ちで自分をみつめ直す作業を行った時に生まれるのである。みすゞは常にこの作業を繰り返していたのだろう。そしてまた、詩で表現することで、みんながこの作業を忘れずについてくれたらと願ったのだろう。

　純真な気持ちをもち続けることは難しい。そのことは誰もが度々思い起こすことであろう。みすゞもその一人であったと思う。だがみすゞは、純真であろうと努力し続け、自分を見つめ直しながら行動し、詩に表現した。ゆえにみすゞの詩は口先ばかりのうすっぺらな詩ではなく、説得力を持つ詩であり、心の底に響いてくるのである。その説得力をもった純真な心が表れているのが、みすゞの詩の魅力の一つであると思われる。

第三節　「ふるさと」

　みすゞは自分のふるさとを題材に、数多くの詩を描いている。みすゞがふるさと仙崎を心に焼き付け、多くの詩に残すほど愛してやまない理由は何であろうか。その理由の一つとして仙崎という町が持つ優しさを挙げる。

　仙崎は、江戸時代からの三大捕鯨港の一つであった。仙崎の人々は、鯨の命が人間の命を支えているということをわかっていて、みすゞが生きた時代、そして現在まで絶えることなく鯨のための法要を営んでいる。そういった、人は何かに支えられ生きているということを理解し、仙崎という町を愛し、人々が生活している町であるからこそみすゞは、仙崎を忘れることはできず、懐かしみ、恋しく思い続けたと考えられる。

　また、仙崎という優しい町で育った思い出も、みすゞが恋しく思い、詩に歌った理由の一つであると考える。

　仙崎を離れてからのみすゞの人生は、辛く、悲しい事が多かった。運命の波にもまれる度に、幸福な思い出のつまった仙崎に想いを馳せたことであろう。思い出の中の仙崎は美しく輝き、淋しさや苦しみを癒してくれたに違いない。ゆえに愛する仙崎を詩にせずにはいられなかったのだろう。

「王子山」

公園になるので植ゑられた、　桜はみんな枯れたけど、
伐られた雑木の切株にや、　みんな芽が出た、芽が伸びた。
木の間に光る銀の海、　わたしの町はそのなかに、
龍宮みたいに浮かんでる。　銀の瓦と石垣と、　夢のやうにも、霞んでる。
玉子山から町見れば、　わたしは町が好きになる。
千鰮（ほしか）のにほひもここへは来ない、

わかい芽立ちの香がするばかり。(註13)

みすゞの詩は、なつかしく美しい子供時代を思い出させてくれる。嫌なこともあるはずなのに、自分の子供時代は恵まれていた気持ちになる。それは短い詩の中に、みすゞの嬉しい子供時代を詰め込んでいるからだろう。酒井大岳氏は、みすゞを取り囲む一切があたたかかったから、小さな町のすべてがあたたかくとらえられており、またそれは、みすゞの明るさ、善良さを物語っていると語っている。そして、「王子山」について、

まちを見下ろすということは、自分を見下ろすことなのだと思うのです。みすゞさんが自分をいとおしんでいるところに、(註14)ほのぼのとしたものを感じとらないではいられません。

とも語る。この言葉にもあるように、みすゞは常に「自分を見下ろす」自分の心を見つめる人であったろう。そして、自分の心にある悲しみや、淋しさを発見し、明るく前向きな姿勢で慰め、克服したに違いない。ゆえにみすゞの心の動きを表現した詩は、私達の心をとらえて離さないし、そんなみすゞを育てた町である、「ふるさと」仙崎もまた、みすゞの詩の魅力であると考える。

第三章　みすゞの祈り

みすゞの作品の魅力を探るうちに、共通するものが根底に流れていることに気が付いた。それは、みすゞの心の動きから生まれる、「祈り」ではないかと考える。みすゞが希望を持ち、願い、考え、行動し、悩み、また行動する。その心の動きが、「祈り」となって詩に託されているのではないだろうか。

みすゞにとって祈るということには二つの種類があると考えられる。一つは宗教性を多く含んだ祈りであり、もう一つは、願望や希望を伴う祈りである。この二種類の祈りは、私達にどう届いているかを考えてみたい。

はじめに宗教性を多く含んだ祈りについて考えてみたい。

詩にも表現されていると考えられるみすゞの祈るという行為は、ふるさと仙崎が、信仰心の厚い人々の住む町であり、家にいては、仏前に手を合わせる祖母や母の姿を見、遊び場である神社や寺では、墓に参る人々の姿を見るという日常生活の中で、詩を書く以前から自然に行われていたと思われる。そして、見えないものの存在を感じ、神仏を信じ、命をいとおしむ心を育てていったのだろう。ゆえに、みすゞの信仰心による祈りは、神仏に祈ることであり、懺悔、願い、救いを含む祈りであった。そんな、みすゞの宗

教的精神世界は、詩にも度々集中して表現される。

「蜂と神様」

はちはお花のなかに、　お庭は土べいのなかに、　どべいは町のなかに、　町は日本のなかに、　日本は世界のなかに、　世界は神様のなかに。(註15)
そうして、そうして、神様は、　小ちやなはちのなかに。

花にとまった蜂から宇宙は広がり、神の手の中の大宇宙は、神の創りし蜂の中に集約されている。その感動を表現していると思われる。神仏の存在を信じる心は、見えるものだけでなく、見えないものの存在を信じ、そこに温かい眼差しをむけ、思いやる気持ちをもたらし、生命の尊さを教えてくれる。そういったみすゞの精神世界から生まれた、広く、深く、やさしく、温かい心は、私達の価値観や、先入観、偏見などを変える詩を創りだしていった。

「星とたんぽぽ」

青いお空のそこふかく、　海の小石のそのように、　夜がくるまでしずんでる、　昼のお星はめに見えぬ。　見えぬけれどもあるんだよ、　見えぬものでもあるんだよ。
ちつてすがれたたんぽぽの、　かわらのすきに、　だァまつて、　春のくるまでかくれてる、　つよいその根はめに見えぬ。　見えぬけれどもあるんだよ、　見えぬものでもあるんだよ。(註16)

「大漁」

朝焼小焼だ　大漁だ　大羽鰮の　大漁だ。　濱は祭りのやうだけど　海のなかでは　何萬の　鰮のとむらひ　するだらう。(註17)

宗教性を含んだ祈りとは、神仏を信じる心、見えぬものでも信じる心から発せられた、様々なことを平等に、優しく観るということをわすれないように誓う祈りである、と思う。

次に、二つめの、願望や希望を伴う祈りについて考えてみる。

この祈りは、みすゞ自身の体験を通して生まれてきたと思う。ゆえに、それは説得力のあるもので、だからこそ私達の心に響いてくるのであると思う。ここに、みすゞの祈りを強く感じる詩を読んでいきたい。

「空の鯉」

お池の鯉よ、なぜ跳ねる。　あの青空を泳いでる、　大きな鯉になりたいか。　大きな鯉は、今日ばかり、　明日はおろして、しまはれる。　はかない事をのぞむより、跳ねて、あがつて、ふりかへれ。　おまへの池の水底に、あれはお空のうろこ雲。(註18)　おまへも雲の上をゆく、　空の鯉だよ、　しらないか。

「私と小鳥と鈴と」

私が両手をひろげても、　お空はちつとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のやうに、　地面を速くは走れない。
私がからだをゆすつても、　きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のやうにたくさんな唄は知らないよ。
鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがつて、みんないい。(註19)

みすゞもこういった詩を書くことで自分を励ましながら、ああなりたい、こうなりたいと願ったことだろう。みすゞの希望や願望を持った祈りは、みすゞ自身から強く発せられている。みすゞの祈りが強いから、私達の心の底にまで深く刺激し、みすゞの祈りが純粋であるから、素直に心に響いてくるのである。決して説教がましくない、優しい言葉で語りかけてくるみすゞの祈りは、一緒に頑張ろうよとでも言っているかのようで、共感できるし、受け入れやすい。それはみすゞがそんな人間であったからだろう。みすゞの詩にはみすゞのありのままの姿がある。

二つの種類に祈りをわけて話をすすめてきたが、この二つのいのりはみすゞから生まれているという共通点のほかに、この二つは背中合わせであるということが言える。宗教性をみすゞが多分に持っていたからこそ祈り、祈りの中に救いを求め、救いを求めたから祈りの中に希望や願望が生まれたのであろう。

この二つを総合した祈りは、全詩の根底に流れるものである。みすゞは誰もが心に持っていなければならないと考えられる。何に対しても優しい眼差しをむける目を養ってほしいと願っている。それは、みすゞだけに限らず、私達の祈りであるとも思う。自分一つで世界は変えられるのである。誰もが願い、祈ることをみすゞは優しく歌っているのである。いつでもそのことを忘れないことを祈って・・。

三、結論

現在から約七十年前に書かれたみすゞの五百十二編の詩には、二十六年という人生が凝縮され、輝き、絶えず瞬いて、私達に様々なことを教え、思い出させ、自分自身の心

を見つめ直させてくれる。それは、みすゞ自身や私達の多くの祈りが詩に込められているからである。みすゞの詩には、詩の中で祈っているから、私達の心を浄化する力と、安らぎを与える力があり、ゆえに私達は救われていくのだろう。安らいだ心は自分以外の存在に優しくなれる余裕を与え、みすゞのように見えないものの存在にまで大切に思う温かい心を得ることができる。

みすゞの詩は、みすゞの祈りの詩であり、祈りであるがゆえに、みんなの魂を救ってくれる。人は心の奥底で救いを求めているのだと思う。それを救ってくれる力をみすゞの詩は持っている。その力が、私達を惹きつけて離さない魅力であると思う。

註

（1）『童話（復刻版）』岩崎書店、昭和五十七年創刊号、（コドモ社、大正十二年九月号、通信欄）

（2）『童謡詩人金子みすゞの生涯』JULA出版局、平成七年七月七日第6刷

（3）（2）に同じ。

（4）（2）に同じ。

（5）（2）に同じ。

（6）（2）に同じ。

（7）『新装版金子みすゞ全集I・美しい町』JULA出版局、昭和六十年八月二十五日発行

（8）『新装版金子みすゞ全集II・空のかあさま』JULA出版局、昭和六十年八月二十五日発行

（9）（7）に同じ。

（10）『新装版金子みすゞ全集III・さみしい王女』JULA出版局、昭和六十年八月二十五日発行

（11）（8）に同じ。

（12）『〈授業への挑戦〉感性の人金子みすゞの詩の授業化』明治図書出版、平成六年三月初版刊

（13）（10）に同じ。

（14）『金子みすゞの詩を生きる』JULA出版局、平成五年八月三十一日第1刷

（15）（8）に同じ。

（16）（8）に同じ。

（17）（7）に同じ。

（18）（7）に同じ。

（19）（10）に同じ。